

第十八話 「自炊」について（下）

●「電子書籍」化、百万点をめざす

その後、「電子書籍」の汎用性は広がっているようだ。

札幌市中央図書館を始め、地域図書館において、独自に地域資料について電子書籍化する試みが始まった。これは、ゆくゆくは図書館でも電子書籍の貸し出しを始めるため、その実証実験として試験的に取り組むのだという。ベストセラーなどの複本を何冊も図書館が揃え、無料貸本屋化していることには批判もある。データだけを貸し出すという「電子書籍」は、意外に図書館にこそ向いているのかもしれない。

あるいは、「電子書籍 国が後押し」という見出しで、日本の電子書籍市場を拡大させるため、政府が九割を出資する産業革新機構が、総額百五十億円を出資するというニュースを「朝日新聞」が伝えている（二〇一二年三月二十九日）。

同紙によれば、国内の出版業界が連携して設立した「出版デジタル機構」は、百万点の書籍の電子化を目標としているという。現在、電子書籍の国内市場規模は、年間約六百億円。これが、二〇一五年度には二千億から三千億円に急成長する、との試算もある。「電子書籍」が、先の見えない出版不況を救う救世主となるのだろうか。

しかし、過去の出版物をすべて電子書籍化するなんてことは難しい。「百万点の書籍を電子化」と聞くと、ほとんど読書は電子書籍でまかなえそうな錯覚を起こすが、自分が本当に必要とする本は、そのうち一万分の一あるかどうか。戦前に出された本などは、ほとんど手をつけられないのではないか。

自分が本当に必要とする本。これを電子化するには、やはりまだまだ「自炊」に頼らざるをえないのではないか。

手持ちの本を、自ら電子書籍化して、端末に取り込む。すべてデータ化されるため、ブックとしての「本」は不要になる。したがって、「蔵書の苦しみ」からは開放される。これを「自炊」と呼ぶ。前回、電腦化から立ち後れた脳を駆使して、そのシステムと現状について解説した。

●「自炊」推進派の詩人

しかし、われわれの回りで、「自炊」を実践している知人は、いまのところいないようだ。「われわれの回り」とは、雑誌の編集者だったり、新聞記者だったり、新刊書店員、古書店員、そしてライター仲間など、いちおう広く「本」に携わる人たちなのだが、「自炊」体験を聞いたことがない。いや、本当のところはわからない。私が注意してリサーチすれば、案外「いや、やっていますよ」と言うかもしれない。

「自炊」推進派を探したところ、詩人の清水哲男さんが、すでに実践中と聞いて、取材

をさせてもらった。詩集『喝采』『スピーチバルーン』『東京』などの詩人・清水さんの紹介を少ししておく。

清水哲男さんは一九三八年東京・中野の生まれ。敗戦後に山口県に一家で移転、以後大阪、西多摩郡などへ移り住み、小学校を三度、中学を三度変ったという。都立立川高校を卒業後、京都大学文学部哲学科へ入学。京都で大学生活を送り、二十五才のとき、第一詩集『喝采』を発表。詩人としてスタートする。

大学卒業後に上京し、芸術生活社、河出書房で編集者を務める。仲間と編集プロダクションを一時期やっていたが、詩を書くかわたら、フリーのライターに。時代は七〇年代。活字文化に勢いのある時代で、清水さんは屋ライターとして、「電子レンジの使い方」から、マンガ論、「少年マガジン」のカラー大図解、花の中三トリオの本やきわどいものまで、何でもこなした。「本」が必要な仕事ばかりであることは言うまでもない。

また、一九七九年から十二年間、FM東京で朝の生ワイド番組のキャスターを務めたという、異色の経歴を持つ。取材中、このキャスター時代の話もうかがったが、一冊の本にまとめておいてほしいほど、おもしろい話がいっぱい出てきた。

一九九七年から「俳句歳時記」のサイトを起ちあげ、現在にいたるまで、ネット上で俳句の鑑賞を続けている。電腦化にいち早く着手した詩人でもある。

ワープロに手を染めたのも早かった。一九八四年に、当時七十万円を投じて、初期の東芝ワープロの機種を購入した。

「新しいもの好き？ それもあるけど、ぼくは筆圧が強くて、原稿用紙に文字を書いているうち、腱鞘炎になったんですよ。ドアのノブを回すのさえ、痛くてできないような状態になって、やむをえずワープロを使い出した。詩でも、ワープロで打って、プリントアウトしたものを編集者に渡す。それで、言われたことがありますよ。『苦勞の跡が見えない』って（笑）」

●清水哲男さんの蔵書歴

ワープロから自然にパソコンへ執筆環境は進化して、三年前に「iPad」を購入することになるのだが、その前に、清水哲男さんの蔵書環境の変遷について。

まずは京都大学へ通う大学生時代。

「下宿したのは、最初が小唄の先生の家で、二回目が長唄の先生。……そう聞くと、色っぽく聞こえるでしょう（笑）。まったくそんなことはないんだ。習いに来るのが素人で、それを師匠が指導する。同じところを何度も繰り返すだけで、しかも下手でしょう。聞いてられませんよ」

ただ、大家として素人の下宿なので、出入りは自由なのがよかった。いずれも六畳間に本棚は一つ。「文学部の学生で、それで足りたんですか？」と聞くと、当時は学生運動に忙しく、そんなに本を読んでいるヒマがなかったのだという。

「読みたい本があったら図書館へ行けばいいし、それに何冊も本を買うほど経済的に余裕もなかった」

一九六四年、御徒町にある「芸術生活社」へ入社した頃、月給二万一九〇〇円で下宿は借りられず、社の編集室の隣りにあった六畳間に寝泊まりしていた。写真部の同僚と同居だったので、ほとんど自分の荷物は置けない。「このときは、本棚なんかありません。床に積みあげているだけ」とのこと。

芸術生活社を辞めて、河出書房が発行する文芸誌「文芸」の編集者となる。このとき、高円寺のアパートに部屋を借りて、ようやく本棚が置けるようになる。部屋は二階にあった。

「壁際に背の高いスチールの本棚が三本あって、これで本が増えてもだいじょうぶ、だと思っていたら、河出（書房）では、当時、自社で出した新刊を社員に配るんですよ。毎日のように二、三冊、本をもらって帰ったら、あつというまに本がたまってしまった」

ある時、大家に呼ばれて、一緒に外へ出た。大家が「ちょっと、家を見てください」と言う。見ると、あきらかに木造二階家が傾いていた。清水さんの部屋がある方、片側の壁に本を置き過ぎて、その重みで傾いたのである。これは何とかしなくてはいけない。それからは、本棚に本を置くのは避けて、寝床の周囲に、床から直に本を積むようにしたという。

本を売る、ということはしなかったのか？

「それはしなかったんですよ。河出（書房）からもらってくる本は、同僚が作った本でしょう。いわば、同じ釜の飯を食った仲間の本だから、それを売ってというのは抵抗がある。しかし、詩の時評なんかを始めると、全国から詩集が送られてくる。それがすごい量で、一年に数百冊単位でしょう。これも売ってお金にするのは忍びなくて、溜まったらゴミの日に出していました。売るより焼かれるほうがいいたろう、と」

●売られてさっぱりした

その後、家を傾かせた高円寺の下宿に別れを告げ、中野の賃貸マンションへ引っ越していく。清水さんが結婚したからだ。ここは2LDK。このとき、別に職場を借りた。六畳にキッチンのついた部屋。高円寺の下宿のときと同じ轍は踏むまいと、職場では本棚を置くのをやめた。

「デスクも座り机にして、そのまわりに本を積むようにしました。林忠彦が撮った坂口安吾の執筆姿の有名な写真があるでしょう。あんな感じですよ」

この中野のマンションから、三十数年前に現在も住み続ける三鷹のマンションへ移転するのだが、このとき、ちょっとした事件が起きた。清水さんは「少年マガジン」のライターや、マンガ論をてがけていた関係で、創刊号からの「少年マガジン」「少年サンデー」、それに虫プロダクション発行の「COM」のバックナンバーをみんな揃えていた。いまと

なつては、ちょっとした「お宝」である。

仕事が忙しく、引越しの作業をすべて奥さんにまかせていたのだが、ある日、自宅マンションへ帰ってみると、これらマンガ雑誌がすっかり無くなっていた。聞くと、いらなと思って処分したという。これはショックだったろう。

「いや、そうでもないですよ。カミさんからしたら、引越しで不要なものを処分するとしたら、古いマンガ雑誌なんか、真っ先に要らないものでしょう。わかるんですよ。それじゃあ、自分では捨てられるかという、できないでしょう？ だからかえってさっぱりした、という感じでした」

長年住み続けている、現在のマンションは3LDK。六畳間を書斎兼自室にしている。ここにほぼ蔵書が集められている。ダイニングキッチンにも、頑丈で立派な本棚が置いてあるが、「ここには高そうな本、つまり女房が見て立派な本、と見えるものだけを並べている」。

自室には、三層の移動式本棚があるがすでに満杯。そのすぐ横で、清水さんは寝ているので「地震が来ればおしまい、でしょう」という。

●iPad はぼくの「ランドセル」

iPad を購入したのは、この端末を読書機として駆使するため。

「今年（二〇一二年）、七十五才でしょう。もう残り、どう考えてもそんなに（本を）読めない。これ以上、本を増やすのもイヤだし、買った本はどんどん『自炊』して、これに入れていきます」

現在、ひんぱんに「読む」カラー版の歳時記を始め、約七百点の書籍を電子化して、端末に取り込んでいる。「自炊」作業は業者に依頼し、費用は、一冊百円から三百円ぐらい。

目の前で、じっさいに愛用の iPad を操作してもらったが、じつにスムーズ。高齢者が新製品を相手にモタモタと格闘する、というイメージはまるでない。

「接続が早いし、歳時記に掲載されたカラー写真も、紙に印刷されたものより、こっちの方がきれいですよ。それに、文字が自在に拡大できるのもいい。ぼくは、目が悪くて、これに慣れちゃうと、ちょっと文庫本の文字なんか、読めないですねえ」

清水さんは外出時にも、必ずこの愛機を携帯し、いつでもどこでも取り出して「読む」という。メールのやりとりも、今はこれで済みます。映画などもこれに取り込んで見ているという。

『チャーリング・クロス 84 番地』は、どうしても見たい映画で、DVD も手に入らなくて、アップルの iTunes からダウンロードして、ようやく見られた」

（注／アンソニー・ホプキンスとアン・バンクロフトが主演した、イギリスの古書店主と顧客の女性の手紙のやりとりによる交流を描いた1986年のアメリカ映画。デヴィッド・ジョーンズ監督）

ただ、映画はデータ容量が多いため、そんなには取り込めない。「本は映画の百分の一ぐらいでしょう」と清水さんは見る。その点でも、本は電子化に向いていると考える。清水さんは、詩集でさえ、この iPad で読むことにも、まったく抵抗はない、という。

この先、まだ三百点程度を追加して、全部で電子ライブラリーを千点ぐらいにしたいという。残る人生を考えれば、もうそれで充分。清水さんにとって、iPad はいまや手放せない移動書庫となりつつある。

「なんでもここへ入るでしょう。そして好きなときに取り出せる。私にとって、これ (iPad) はランドセルみたいなもの、なんですよ」